

一九六〇年（五〇歳）

三月十六日

春となったのだろう。精神の患者が次第にふえてきた。

四月七日

大清水の風呂に入る。病院が出来てからまだ入ったことのない風呂であった。

五月五日

午前七時半、母や私や弟や妹たちに死に水をとって貰って父は永眠していった。

この父は、ほんとうにご苦労さまであった。苦労はしたけれども、幸福でもあった。

父の苦労と幸福は、その悩み抜いた苦労の大きさと言うか、時代性とでも言うか、そんなことになかにあった。

父と母の汗の労働、夜を日につぐ父と母の労働によって私は中学四年から弘前高等学校に進みそして東京帝国大学医学部に進んだ。父の得意、母の喜びはたとえようもなかった。楽天的な父は、今に私が大学を卒業して父を遊ばしてくれると手ばなしに先をたのしんだが、母は、夏や冬の休みに帰省してくると、帰りの汽車から落ちないか、小さい頃から私にあった腹痛を起こしていないかとばかり心配して安く眠らなかった。

二番除草はことのほか暑く、汗は身体がかわく間もなく流れた。夕闇の涼で汗がひえると、全身に塩が白く浮いていた。汗が塩となって肌にくるほど父と母は働いたのであった。それでも家路につく二人は、東京の大学で医学を学んでいる私のことを思うと、疲労も忘れた。私を思い私のためにそのように働いてくれた父と母であったが、闇に包まれようとしている家にたどりつき父も母もぼうぜん自失してしまった。

地主成田友三郎の本家で、村一番の地主であり、県会の副議長をしていた成田匡之進から、私に大へんなことが起きているから、すぐ来いとどの命令がとどいた。父と母は田の泥土のついてる手足を大いそぎに洗い流して地主で県会議員の家に向かった。村は黒い闇に包まれ、屋根から屋根へととんでゆく夜鳥の声が無気味に父と母の鼓膜にひびき、皮膚をひやりと襲った。地主は居間の横座にあぐらをかいていた。その前に正座した母は静かに頭をたれて礼をしたのに、父はわくわくとふるえてしまった。

「お前だちの武一あ、東京の大学で医者になる勉強ばかりしていると思っていたのに、共産党やっていたのであったじゃ。そうら、みろ、今日の新聞だ、刑務所にぶちこまれているから」

県会の副議長は新聞を父につきつけたが、父は新聞をよめなかった。母はじっと頭をたれただけであり、父はおろおろになってしまった。

たったいままで父と母との希望の星であった私が、一瞬のうちに父と母の心の中で警鐘を乱打していた。地主の家を辞した二人は頭をあげなかった。口もきかなかった。空をみたしている蛙の声も耳に入らなかった。露となっており始めていた夜気も肌におぼ

えなかった。家に帰った二人は囲炉裡の横に座ってはみたが、飯をたく気にも火をおこす気にもなれなかった。父はしきりと溜息をつくだけであった。母は力なく立ち、仏壇の前にゆき燈火をつけ、仏を念じた。

東京の大学に入学してくれ、郷里一帯の感嘆と羨望の的となったときの喜びと期待が大きかっただけに、裏切られたという失望は大きかった。父は、私を今日までにするために苦勞の数々をくどくどと並べて悲嘆にくれたが、母は静かにぬいものを始めた。二人の間にはいつの間にか一つの決心が、言わず語らずの上に出ていた。

次の朝二人は再び県会副議長に呼ばれた。この県会議員は私が東京の大学に学ぶようになってからは私や私の父母を物心両面から援助してくれていたのであった。私の父もこの県会議員にはそれ相当の礼をつくしてもきていたのであった。私が小学生だった頃の父は、田をつくり、小作米をおさめ、林檎をつくり、それを林檎移出商に無条件にあずけ無条件に賣って貰っていた哀れな百姓であったのだが、私の中学入学以来、ものを政治的に考えるようになっていた。それは父の生涯に一つの時期を画していたと言うことができる。小学六年より学ばなかった父は、新聞もろくに読めなかったし、物を考えたり、物を比較したりすることのできなかつた人であったのを、私の中学入学試験をきっかけとして父の視野は広がってきた。私が父が最後の呼吸をひきとったこの父の家から弘前に通学するのを見ているうちに、田舎の一農村ばかりが生活舞台であったのに、父の生活意識は弘前という都市、そこから日本全国の事件にも目を向けるようになっていた。私が中学校でつきあっている級友たちの消息を家に帰って夕食の上で父と母に語ることによって父の注意は弘前を中心とした津軽全土に広がっていった。私が遊びにいたり立ちよったりする級友の家庭には官吏があり、軍人があり、未亡人家庭があり、社会重役があり、それらの家庭のことを私からきいているうちに父の心の世界は次第にひらけていった。この点で父は母よりも優っていた。私の古い過去、私の幼児のことをよく語ってきかせる母に比べて、父は私のそうした話を喜んでくれた。政治的にももの考えるようになってきた父は昭和二十二年の普通選挙権が国民に実施されるや、選挙運動には自ら出てゆくようになっていた。県議会の選挙に父は自分の意志からいまの副議長の選挙に参加していったのであった。私の中学入学は、父の上に色々の苦勞と同時に、政治を与えたともいえる。

私の共産党事件は、父に政治批判の機会を与えたとも言える。

私の投獄を知ってこれからの対策をこの県会議員の力を借りる気になったのも父としては当然であった。父と母は県会議員の前に膝を並べて座り、東京に出ていってみたい、東京に出て関係者に会い、私のしでかしたことを直接たしかめてみたいが、東京は全くの不案内だからよろしくたのむと頼み込んだ。父と母はこの県会議員から幾枚かの紹介状と依頼書を貰って東京にのぼってきた。生まれた村と、私が中学校と高等学校時代を過ごした弘前市より知らない父と母がどうかして、東京は中野の豊多摩刑務所の未決房に私を訪ねてきて、金網をへだてて私と面会した。母は悲しい表情でじっと私を

みつめ、私に愛情の眸をかがやかしてくれたのに、金網の向こうで私の顔を見るなり父だけが泣いてしまった。私は立会いの部長看守ににらまれながら、何も悪いことをしていない、世の中を美しくするために頑張っている、私たちの頑張りによって父や母達の本当の幸福が来るのだとしきりに金網の向側に話しかけた。父は一言も説教めいたことを言わなかった。母はしきりに私に質問した。寒くないか、腹がへらないか、蚊はいないか、菓子をたべたくないか、夜ねるとき肩をひやすではないかと、母はおしゃべりであったが父は何も言わなかった。面会時間が切れたと看守が告げたので、私はもう一度、何も悪いことはしていない、いい世の中をつくるために頑張ったために捕らえられたと父と母に告げて父と母を帰した。

父と母は、始めてでた東京の雑踏と騒音とビルデングとスピードに目を白黒させて転倒せんばかりになったが、恐れておれなかった。母に手をひかれるようにし、農耕で日やけした顔の中を目を白黒させながらも東京大学医学部長室に林春雄博士を訪ね、私のことについてたずねた。

「あなた方の息子さんはいい子です。美しい心を持っています。考えていることも、やったことも悪くありません。ただ世の中をほんとうには知っていないから、いいと考えたことを、すぐそのまま、なまでやる気になったのです」

はげた美しい頭をした大柄の部長の博士は、その長い口ひげをいじりいじりそう父と母に語ってくれた。二人は何とも言わないで部長室をでた。

刑務所で私は、悪いことはしていない、いい世の中、美しい世の中をつくるために頑張っていると主張したことを父は、もう一度かみしめてみた。博士の部長は、いい子です、美しい心を持っていますと言ってくれた。私の言葉と部長の言葉は、父の心の中できれいに合ってふくれた。父はふらふらと宙にういてゆくような気持ちであった。俺の息子に限って火もつけなければ人も殺さない、そう思って東京にかけつけてみると、部長の博士までそう言ってくれた。部長が言ったその他のことは父の心に残っていなかった。いい子が、美しい心を持った息子が、信じていた息子が刑務所にいる、これは何としたことだろう。

私が中学に入ることによって父の中に動きはじめ成長してきた政治的関心は、刑務所と大学で洗礼されて大ゆれにゆれた。田と林檎畑のあるわが家に帰る汽車の中で、母は、「お釈迦さまでも、人から誤解されたり、ねたまれたりして苦労したんだものなあ、武一だってそれだよ」

と父にささやいた。息子を信じたい、それは父と母にとっては自分を信じたい一念であった。父も母も悪いことをしたおぼえはなかった。父と母には罪の観念はなかった。そこから私を信ずる父と母は、私の主張は釈迦の境地であるという風に信じてしまった。刑務所に行き判事に対しても私をお手やわらかにと嘆願して来なかったことも、医学部長に会って私を退学させないでくれと懇請してこなかったことも父を後悔させなかった。帰路の旅は、私を刑務所に置いたまま帰って来たのであったが不思議に明るかった。

父の屍は仏壇の前にねかされている。死んだ父の顔は安らかである。額の皺は私にはほえみかけている。死んだのに血色は生きてるようにいい。母は、みんなの心配と相違して元気である。いつもよりは元気なのではないかとさえ見える。豊吉(父の異母弟)、私、ショウ(私の妻)、猿賀の妹とその夫、十川の妹とその夫、本郷の妹とその夫、林崎の妹とその夫、信一とその妻、政吉(母の姪の夫)たちで葬式の日どりや、死亡通知先の決定などをする。私も三万から五万を支度すると言っても母はうけつけない。

くやみの客がやってくる。弘前からは病院の三上さん、宮本さん、福原きみ子さん、山内つるみさんたちくやみにやって来てくれる。

明後五月七日と決定された葬式の準備のために家の中はにわかにな忙しくなる。私はこの家の主が坐る座に坐って、来客に礼をのべ、父の病状を説明する。来客がとだえるとペンを握ってこの日記を書きつづった。夕食時になって来客が一応とだえる。

「兄さん何書いてる？」

猿賀の妹である。

「じっちゃんのこと書いている」

「読んできかせて」

そんな会話をしている私と猿賀の妹の四周に全員が集まってきた。

私はところどころ拾いよみした。みんな目に涙を出してしまった。父が最後の息をひきとったときのようなようであった。よみながら、私まで泣いてしまった。

夕食をすぎると村の人たちが沢山通夜にきてくれる。村の有力者の殆ど全部顔を出してくれる。間山正夫、成田秀雄、対馬茂作、成田良治など二十数人を前にして私は、父のこと、高血圧のこと、アルコールのこと、大相撲のこと、など二時間ばかりしゃべる。そのあと村人たちはトランプや花札をしたりして朝の四時になる。父のためにうれしかった。

五月六日

父の明日の葬式を控え、一日一杯父の家にとどまる。今朝四時まで起きていたので眠く信一の部屋にのがれて眠る。

病院、医局、病院労組、弘前文学会、原水禁、市民会議、日朝協会民医連、三上齋太郎、宮本昭義さんたちから父のため花輪をとどけられる。済まなくもあり、ありがたくもある。

父のことを書きつづけよう。

信じていた息子の私には悪いことはできない。それは父と母の確信であったし、刑務所にいる私の発言と医学部長の発言によってその確信を確かめることに成功した父は、家にたどりつくともあまり心配しなくなった。父はその点で人がいいばかりでなく楽天的

であった。次の夜からすやすやと眠った。父の楽天に比して母は苦勞性であった。刑務所の高い塀の奥にいる私のことを思うと眠れなかった。朝早く村のお宮に日参して私の無事を祈った。父は私の投獄を恥じることなく、おびえることなく、村人と毎日の挨拶をかわした。そんな父であった。

父と母が東京へ出て、刑務所と大学に行ってきたことは、父と母とを鴛鴦にしていた。学問と経験のない二人で東京に出てゆき、刑務所と医学部長に会って私の行動をたしかめ得たことは、父と母の愛情を、夫婦としての協力と助け合いを、たった一つの、いわば英雄的行動によって、ぐんと強め深めた。二人で手を取りあえば、文字は知らなくとも、学問はなくとも、どんなことでも出来るとの信念を父と母に与え、それを不動のものにした。父は傍らに母がいると心強かった。母は父の近くにさえいると心配はなかった。それからの父と母を、私たちは「おしどり」と呼ぶことが次第に多くなった。起きるのもねるのも一緒であった。畑にでて行くのも一緒であった。畑から帰るのも肩を並べていった。父と母との愛情はこのとき、質的变化をとげたのではなからうか。

愛情は困難をきりぬけてゆくうちに育ってゆく。愛情は困難がつづいてゆく限り永久なものになってゆく。

私の未決収監は二年つづいた。私は豊多摩の刑務所で、検事からも判事からも一日とて調べられることなく一年間独房にぶちこまれたあと、長尾という予審判事の前にひき出された。忙しくて、事件が山と積まれているので私を調べる時間はない。今日やっと私を取調べ日程の中に組むことが出来た。今日一日だけだ、あとは一年後になるか、二年後になるか分かったものでない、ああ忙しい、私の事件はちっぽけだ、こんなちっぽけな事件に日を取りたくない。どうだ、共産党の運動をやめてもう一回大学に帰らないか。そうしてくれるならば間もなく公判に廻してやる、そうでないと第二回目の取調べは来年になるかも知れない、私の事件みたいなつまらないことに日をつぶしたくない、大学に帰ることにすると今日これでよい、そうでないと来年になる。予審判事はそう言って立ち、この返事は昼食後にきくことにすると行って、何も調べないでひきあげて行った。一年三百六十五日、取調べなしに留置されて来たことを思うと私は急に淋しくなった。その淋しさに堪えかね、午後の取調べにおいて、私は、

共産党主義は正しいと思う

しかし医師として身を処してゆきたい

大学の医学部に帰れるようにしてほしい。

そう判事に申入れ、予審調書に拇印をおしてしまった。文句なしの転向であったのである。半年後に公判が開かれ、懲役二年、執行猶予三年の判決をうけ、私は父と母の家に帰ってきた。父も母も、もう共産党のことはやるな、とは一回も言わなかった。おしどりになる前に父と母は私の世界観を信じて疑わなかったのである。私のすることである。必ず学校に帰ってゆくに決まっている。父と母はそう私を信じて疑わなかった。

愛情は困難がつづく限りつづいてゆく。それが私の父と母の場合であった。

五月十九日

自民党の出鱈目暴力で安保を押し通す

六月四日

安保反対、安保粉碎の六・四デモ。日本はじまって以来の最大の規模で実施される
夕方五時弘前でもデモをやる

七月二日

私はどうすればいいのだ。もう一度政治に帰ればいいのか。そうではない。私が党から除名されたとき、考えめぐらし追求してきた医学と文学のことに専念するのはほんとうではなかるうか。

七月二十二日

本郷に往診。母を訪ねる。父が去っても意外に元気である母に安心する。

八月五日

半日診療を休んで請求事務にたずさわる。医療の官僚統制は医療を殺すばかりである。

九月二十四日

東日本学術集団会、完全に面白くない。私は「酒精中毒の社会医学」を出題講演した
ほかに、青森県の小児麻痺について特別講演をする。

十月二十四日

八戸からの入院患者〇〇君、インスリン・ショック遷延し、清水先生とともに一夜泊
って治療する。山本君、山形君、中畑君たち資格を持っていない人たちの看護婦学校入
学のつよい希望をきかされながら、患者のかたわらに横になる。

十一月十一日

大清水分院のインテリ患者〇〇さんに万葉集を調べてもらう。

十一月二十三日

有楽センターにヒステリー患者往診

十二月二十六日

アルコール中毒の社会医学は来年ももう少し追究し、これは一つの論文として医学評
論にでも提出してみたい。アルコール中毒患者の妻の会をつくるのが来年の課題にな
ってきた。病院の検査室もアルコール血中濃度の測定ができるようになった。